

清代八股文における破題・承題の 作成法について（1）

On the “Opening the Topic” and “Receiving the Topic”
Sections of the Eight-Legged Essay

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This essay examines the significance of the first two sections of the eight-legged essay (*baguwen*) — the “opening the topic” and “receiving the topic” sections — before proceeding to look at the principles of composition associated with these two sections of the essay. The author believes that he has gone some way towards answering the hitherto rather unclear issue of the position of these two sections within the eight-legged essay. The “opening the topic” section was the most important section of all, and required meticulous care. It is no exaggeration to say that this section determined the fate of the entire essay. The “opening the topic” section that followed, usually consisting of four or six sentences, further developed material that had not been fully treated in the “opening the topic” section.

はじめに

清代八股文の破題・承題については、すでに「清代八股文における破題・承題について」（『経済理論』第312号・p59～p84・2003年3月：以後、前稿とする）において、不十分ながら考察を行なった。ただ前稿は、資料の制約のため簡略な検討しか行なえなかった。そこで、ここで新たに目賭することができた資料を用いて、清代八股文の破題・承題の作成法についての考察を行ないたい。

前稿で考えたように、破題・承題は、

破題・承題・起講・入題・提股・出題・中股・後股・收股（乾隆丙戌〔一七六六年〕刊『文家模範』による⁽¹⁾）

に分類される八股文のはじめの部分にあたる。

拙稿では、破題と承題について、清代に出版された八股文にかんする文法書をほぼ時代順に並べ、その内容を検討して、破題・承題の作成方法について考えたい。そのために、破題の解説と用例・破題における代字・承題の解説と用例に分けて検討を行なうつもりである。

（1）破題の解説と用例

（i）『初學玉玲瓏』

徐瑄の『初學玉玲瓏』（乾隆十五年〔一七五〇〕序）は、破題について、つぎのように説明する。

破題とは、題中の字と意とを説くなり。題 整うものは、分析して之を言う。[つまり]物を整えて之をして破かしむるが如し。故に之を「破題」と謂う。其の式は、兩句にして止まるに過ぎず。大要（概要）は、[題目の]「意」を破くを以て上と爲す。[題目の]「字」を破くを以て次と爲す。[題目の]句を破くは則ち「罵題」⁽²⁾と爲す。其の法に明破・暗破・分破・合破・順破・倒破・正破・反破有り。或いは上句もて[題目の]「意」を破き、下句もて[題目の]「字」を破く・上句もて[題目の]「字」を破き、下句もて[題目の]「意」

（1）ここでは、乾隆三十一年刊『文家模範』によったが、八股文の形式についてはいろいろな言い方や分類がなされている。たとえば、盧前は、

破題・承題・起講（小講）・領題（入題）・題比（提股）・出題・中比（中股）・後比（後股）・束比（多くは束比を用いず）・落下（收股）（『八股文小史』九葉～十葉・商務印書館・民國二十六年刊）。

というように分類する。また、王凱符（一九三四年～ ）は、

破題・承題・起講・入題・起二股・出題・中二股・過接・後二股・束二股・收結（『八股文概説』十七頁・中華書局・二〇〇二年刊）

としたりする。

- ✓ (2) 唐彪(字は翼修。浙江蘭谿縣の人)は、『讀書作文譜』(康熙三十一年(一六九二)刊)で、「罵題」をつぎのように説明する。

本題の字眼(文字)を將^もって全然て寫^かき出し、渾融(融合)する能わず、是れ罵題と謂う(『讀書作文譜』卷九・四葉・「破題」条)。

- ✓ (3) すでに、前稿で検討したことであるが、唐彪は、『讀書作文譜』で、明破・暗破・順破・逆破・正破・反破についてつぎのように説明する。

まず、明破・暗破については、

其(破題)の兩句の中、明破・暗破あり。

[割注]: 明破は、本題の字に就きて明明に破^とき出す。「孝弟」字は、即ち「孝弟」と破き、「道德」字は、即ち「道德」と破くが如き、是れなり。暗破は、題目の字を將^もって暗暗に點換す。「孝弟」の類は、「倫」字を以て之に代え、「道德」の類は、「理」字を以て之に代えるが如き、是れなり(『讀書作文譜』卷之九・四葉)。

という。

順破・逆破については、

順破・逆破あり。

[割注]: 順破は、題面の字に照らして上より下る。「學而時習之」(『論語』學而)の先ず「學」字を破き、次に「時習」を破くが如き、是れなり。逆破は、題面の字を將^もって下より上る。「其爲人也孝弟」(『論語』學而)の先ず「孝弟」を破き、次に「爲人」を破くが如き、是れなり(『讀書作文譜』卷之九・四葉)。

という。

正破・反破については、

正破・反破有り。

[割注]: 正破は、題の正面より正語を以て之を破く。或いは反面よりするあり、或いは側面よりするあり。題語を措くに便ならざれば、亦た正意を以て之を破く。[これらは]俱に正破と名づく。反破とは、題意に反して之を破く。蓋し我を以て題を解するの法なり(『讀書作文譜』卷之九・四葉)。

という。

また、趙國麟(字は仁圃。山東泰安州の人。～乾隆十六年十一月。康熙四十八年[一七〇九]己丑科三甲八十名の進士)の雍正六年(一七二八)鐫『制義綱目』は、順破・對破・渾破・串破・先破・後破・逆破を次のように説明する。

順破 題體の上下の層折(重なって転じる)の次第に順がい、之を破く。滾題より下、十一體は、皆な當に之を用うべし。乃ち破題の總綱なり。

對破 題目を將^もって對語(對句)を作り、之を破くなり。兩句の相い對する者有り、四句の相い對する者有り、先ず一句を提(引き出す)する者有り、後に一句を收める者有り。十二體 皆な用う可し。

渾破 題中の層次(筋道・文脈)を分かつ、惟だ大意を將^もって渾含包括して之を破くなり。十二體 皆な用う可し。

串破 題中の層次を將^もって一句を作り、串ね説きて之を破くなり。滾題より以下の十一體は、皆な用う可し。

を破く、或いは首句もて本題を破き、次句もて一句を足らす・首句もて全

- 分破 題中の層次を將^もって分開（分ける・別々にする）し、之を破くなり。滾題より以下の十一體は、皆な用う可し。
- 先破 先ず題面（題目の意図が込められた部分）を破き、後に題意（題目全体の意図）を破くなり。或いは先ず題面を破き、後に題原（意味合い）を破くなり。
- 後破 先ず題意を破き、後に題面を破くなり。或いは先ず題原を破き、後に題面を破くなり。上の二法（先破・後破）は、十二體 皆な用う可し。
- 逆破 先ず下截を破き、後に上截を破くなり。先ず下に在るの實字を破き、後に上に在るの虚字を破くも亦た逆破と爲す（『制義綱目』不分卷・三十九葉～四十葉）。

そして、趙國麟は、順破が最も標準的なものであるとする。

破〔題〕は、順〔破〕を以て正と爲す。順〔破〕は、則ち局意（各部分の意味）自から定まる。對〔破〕・渾〔破〕・串〔破〕・分〔破〕・先〔破〕・後〔破〕の六法あるも、皆な當に順〔破〕もて之を用うべし。逆破は變體なり。隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）の後、多く之有り、終に訓を爲す可からず。惟だ單句題の虚字の上に在る者は、當に逆〔破〕を用いるべし。蓋し逆〔破〕ならざれば、則ち截清（はっきりと切り取る）する能わざるの故なり（『制義綱目』不分卷・四十葉）。

以下、それぞれの形式を簡単に述べてみると、次のようになる。

- 明破 題目の文字に基づいてそのまま破題を作成する。題目に「孝弟」の字があれば、「孝弟」の字を用いて破題を作成するようなもの。
- 暗破 題目の文字を暗暗（それとなく）変換するもの。題目に「孝弟」の字があれば「倫」の字に代えて破題を作成するようなもの。
- 順破 題目を上から下に破いて破題を作成するもの。
- 逆破 題目を下から上に破いて破題を作成するもの。もしくは、題目の出題範囲とはなっていない下の部分を先に破き、後に出題範囲とはなっていない上の部分を破くものもある。また、題目の下の実字を先に破き、後に上の虚字を破くものもある。
- 正破 題目の意味を正面から破いて破題を作成するもの。
- 反破 題目の意味を逆手にとって破題を作成するもの。
- 對破 対句のような破題を作成するもの。
- 渾破 題目の全体の大意を破いて破題を作成するもの。
- 串破 題目の文脈をひとつに連ねて破いて破題を作成するもの。
- 分破 題目の文脈を分けて破いて破題を作成するもの。
- 先破 先ず題面を破き、続いて題意を破き破題を作成するもの。もしくは、先ず題面を破き、後に題原（意味合い）を破くもの。
- 後破 先ず題意を破き、続いて題面を破き破題を作成するもの。もしくは、先ず題原を破き、後に題面を破くもの。

章全節を冒(総括)し、次句もて本題に扣(触れる)し・首句もて題面⁽⁴⁾を破き、次句もて上文を我^{ママ}(找)^①う・首句もて下文を透^②し、次句もて本面を破く・首句もて本題を破き、次句もて下文の不同を吸(含ませる)す。總じて相題して之を爲すを貴とぶのみ(『初學玉玲瓏』不分卷・一葉・「破題」条)。

①找:『斯文規範』に「題首虚字の本位 點せず、結尾に至り方に找足(補足)するを言うなり。回抱[の条(卷之六・二十七葉・「一曰回抱」)]より此に至るまで皆な後面の法なり。通篇の總法を以て之を言う」(『斯文規範』卷之六・二十八葉・「一曰找足」条)。

②透:『斯文規範』に「透は、通なり、過ぐるなり。講じて此の處に在りて、彼の處の精神或いは字句 已に預め先に通過^トし去くを言うなり」(『斯文規範』卷之五・四葉・「一曰透起」条)。

破題は、題目の字面と意味とを説明するものである。二句の形式で作り、題目の意味を解き明かすのを上とし、字面を解き明かすのはそれに次ぐ。題目すべてをそのまま書き出し自分の破題としたものは「罵題」である。解き方には、明破・暗破・分破・合破・順破・倒破・正破・反破があり、上句で意味を、下句で字面を解くもの・上句で字面を、下句で意味を解くもの・上句で題目を解き、下句で補足するもの・上句で題目を含む全章または全節を総括し、下句で題目にたたき触れるもの・上句で題面(題目の意図が込められた部分)を解き、下句で題目の出題されない前文(上の部分)を補うもの・上句で題目の出題されない後文(下の部分)を通し、下句で題目の字面を解くもの・上句で題目を解き、下句で出題されない後文(下の部分)を含ませるものなどがある。すべて題目をよく考えて破題を書くことが貴ばれる、という。

さらに、虚字の使い方にもふれる。破題においては、「焉」字・「也」字・「已」字・「矣」字・「而已」字・「者也」字だけを用いるという。

(4) 題意・題面について、王茂修(字は允徳。直隸博陵の人)は、康熙五十九年(一七二〇)自序『斯文規範』においてつぎのようにいう。

前の一股は題の意思を闡發し、後の一股は題の面目を敷衍するを言うなり（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一發題意一衍題面」条）。

さらに、つぎのようにいう。

先ず題の面目を敘し、後に題の意思を發するを言うなり（『斯文規範』卷之四・十一葉・「一曰敘題面發題意」条）。

また、唐彪は、『讀書作文譜』において、つぎのようにいう。

唐彪 曰く、時藝（八股文）を論ずるに、^{これ}從まで「所以然（然る所以）」と「題面」とを分かつ者無し。之を分かつは、陸稼書（陸隴其）先生より始まる。此れ寔に時藝の實筏（佛教語：悟りの彼岸に達せしめる貴重ないかだ）にして、初學 知らざる可からざる者なり。

陸稼書（陸隴其）云う、成〔化年間〕（一四六五年～一四八七年）・弘〔治年間〕（一四八八年～一五〇五年）以前の文は、「題面」を叙する處多く、「所以然（然る所以）」を發する處少なし。而して題意 已に題面の中に顯然たり。成〔化年間〕・弘〔治年間〕以後の文は、「所以然（然る所以）」を發する處多く、「題面」を叙する處少なし。而して題面も亦た題意の中に内に躍然たり、と。〔唐〕彪 更に謂う、長題は宜しく多く題面を發すべし。多く題面を發せざれば、則ち眉目 清からず。單句題は儘力（全力）もて題面を洗發す。十餘句に過ぎざるも、其の義 已に完し。惟だ多く「所以然（然る所以）」を發すれば、便ち義理を窮むる無く、境界を窮める無きこと有るなり（『讀書作文譜』卷九・二葉・「制藝發題面與所以然之分」条）。

そして、司徒德進（字は月端、号は貫易）・司徒修註の『舉業度針（墨譜）』（司徒修の序文によると、司徒修の族兄の司徒德進の『墨譜』に注を附して『舉業度針』とした）によると、つぎのようにいう。

徐超亨 謂う、一題には必ず一題の「所以然（然る所以）」有り。幾句の漿汁の出るを説き得て方^{まさ}に好し。朱岵思の所謂ゆる「津津として理に入る者、此に在り」なり「津津入理」四字は味う可し。愚の「所以然（然る所以）」と謂うは、乃ち題の骨裏・一層の道理なり。其の骨裏を透すれば則ち題の中邊 俱に透し、「津津として理に入」らざるを得んや。試みに名文名墨を觀るに、篇内 必ず「所以然（然る所以）」の一層有り。但だ粗心もて讀み過ごして覺えざるのみ。其の見易き者は、〔以下の〕如きなり。方靈皐（方苞）の「必也臨事而懼」（『論語』述而）二句題文の領二比は、當に懼るべし・當に謀るべき所以の故を透出す。李君紱（李紱）の「原思爲之宰」（『論語』雍也）二節題文の中二比は、當に辭すべき所以の故を透出す。張素存（張玉書）の「忠信重祿」（『中庸』第二十章第十三節）四句題文の兩大比の中間の停頓の數語は、勸むる所以の故を透出す。左君世容（左世容）の「相在爾室」（『中庸』第三十三章第三節）一節題文の後二比は、言わざる動かざる、亦た敬信を要する所以の故を透出す。皆な是れ深く骨裏を透し、「津津として理に入る」者なり。餘は類推す可し（『舉業度針（墨譜）』不分卷・二十六葉・「透題所以然」条：この条は司徒修が記す）。

すると、題意は、題目の意思（意味）であり、題面は題目の面目（すがた）をあらわすと考えられる。

煞脚字に至れば、止だ「焉」字・「也」字・「已」字・「矣」字・「而已」字・「者也」字を用うのみ。其の他は皆な用う可からず（『初學玉玲瓏』不分卷・一葉・「破題」条）。

- ①焉：「〔「也」字と同じく〕亦た平落の辭なり。但だ「也」字に較べて韻 畧ば輕清にして、意 畧ば虚活なり。以て「也」字は平にして下に就き、「焉」字は平にして上に就く。蓋し少々と擬筆するの住法なり」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉・「焉」条）。
- ②也：「平落の辭なり。凡そ文字の平々と落下し、高さ太はだ揚がらず、低さ太はだ煞（しめくく）らざる者は、之を用う。又た一句中の半落して復た起こる者も亦た之を用う。「可也簡」（『論語』雍也）・「赤也惑」（『論語』先進）の類の如し（『舉業辨字』歇語辭第七・三十二葉・「也」条）。
- ③已：「止なり。足るなり。凡そ文義の已に盡く者は、此れを用いて之を押す」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉・「已」条）。
- ④矣：「截然として緊煞するの辭なり。凡そ文義の説き煞（しめくく）らんと欲すれば則ち之を用う。一定にして移らざるの意有れば、又た抑して復た起こるの辭なり。凡そ將に下文を申べんとす、故に一按を作さんとする者は亦た之を用う。「既富矣」（『論語』子路）・「日月逝矣」（『論語』陽貨）・「吾見亦罕矣」（『孟子』告子上）の類の如し」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉・「矣」条）。
- ⑤者也：「二字 連用す。蓋し指す所有りて順い落すの辭なり。文義 已に畢れば、之を多用す」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「者也」条）。

[用例]

題目：不亦説乎（『論語』學而）

學有説心之境、詩（時）習者自得也（學に心を説ばすの境有り、詩（時）に習いし者は自得するなり）

[上句:]「説」字を明破す。[下句:]上に跟（及）びて「不亦乎」の神を破く。此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・三葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

學有得于心、時習益不容已矣（學 心に得る有りて、時に習いて益々已む容

からず)

[上句:] 「説」字を暗破す。[下句:] 上に跟(及)びて一句を足(補足)す。
此れ是れ先ず題を破き、後に上を足(補足)す(『初學玉玲瓏』不分卷・三葉・「破題」条)。

題目: 人不知而不搢(『論語』學而)

學非求名, 不必搢人之不知也(學 名を求めるに非ざれば, 必ずしも人の知らざるを搢^{いきどお}らざるなり)

[上句:] 題意。[下句:] 題面を破く。

此れ是れ先ず「題」意を破き、後に「題」字を被^{ママ}(破)く(『初學玉玲瓏』不分卷・三葉・「破題」条)。

題目: 又(同上)

忘人之不知者, 其學爲己^①純矣(人の知らざるを忘るる者は, 其の學 己^{ため}の爲にして純なり)

①『論語』憲問に「子 曰く、古の學ぶ者は己^{ため}の爲にし、今の學ぶ者は人の爲^{ため}にす」。

[上句:] 題面を破く。[下句:] 一句を托す。

此れ是れ先ず題面を破き、後に一句を托す(『初學玉玲瓏』不分卷・三葉・「破題」条)。

題目: 其爲人也孝弟(『論語』學而)

賢者論爲人而深, 夫能孝弟者焉(賢者は人と爲りを論じて深し, 夫れ能く孝弟なる者なり)

[上句:] 先ず「爲人」を破く。[下句:] 「孝弟」を破く。

此れ是れ順破なり(『初學玉玲瓏』不分卷・三葉・「破題」条)。

題目: 又(同上)

孝弟兼盡，其爲人可想見矣（孝弟 兼ね盡せば，其の人と爲りや想見す可きなり）

〔上句：〕 分破，又た明破なり。〔下句：〕 下を吸（含ませる）す。

此れ是れ倒破なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・三葉・「破題」条）。

題目：君子務本（『論語』學而）

觀君子之所務，惟在于本而已（君子の務むる所を觀るに，惟だ本に在るのみ）

〔上句：〕 先ず「務」字を破く。〔下句：〕 後に「本」字を破く。

此れ是れ明破なり，又た順破なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・三葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

凡事有本，君子其知所務矣（凡そ事に本有りて，君子 其の務むる所を知るなり）

〔上句：〕 先ず「本」字を破く。〔下句：〕 後に「務」字を破く。

此れ亦た是れ明破なり，又た倒〔破〕なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・三葉・「破題」条）。

題目：巧言（『論語』學而）

言而巧也，其心已可知矣（言にして巧なれば，其の心 已に知る可きなり）

〔上句：〕 明破なり。〔下句：〕 下の「仁」字を注す。

此れ是れ先ず題面を破き，次に下意を吸（含ませる）するなり（『初學玉玲瓏』 不分卷・三葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

以言悅人，有必爲其巧者焉（言を以て人を悦ばすは，必ず其の巧を爲す有る者なり）

〔上句：〕 先ず「言」字を破く。〔下句：〕 後に「巧」字を破く。

此れ是れ題面を分破するなり（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：令色（『論語』 學而）

色而令焉，更工于媚人矣（色にして令あれば，更に人に媚びるに工なり）

[上句:] 破き完^{おわ}れり。[下句:] 一句を斷^①ず。

先ず破き，後に斷ずるなり（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

①斷：『制義綱目』に「前事に即きて其の意を判〔斷〕するを「斷」と曰う。……子聞之曰可以爲之文矣」（『論語』 憲問）は「斷」なり……」（『制義綱目』 不分卷・二十六葉・「六曰斷結」条）。

題目：又（同上）

以色悅人心，巧言之心也（色を以て人心を悦ばすは，巧言の心なり）

[上句:] ●（一字不明）「色」字を破く。[下句:] 上を頤し，下を吸（含ませる）するなり。

此れ是れ先ず本題を破き，後に上文を照らすなり（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：吾日三省吾身（『論語』 學而）

大賢日有三省，誠身之學也（大賢は日に三省有り，身を誠にするの學なり）

[上句:] 先ず「日三省」を破く。[下句:] 後に「身」字を破く。

此れ是れ先ず破き，後に斷ずるなり（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

大賢日有所省，可略舉其目焉（大賢 日に省みる所有りて，略ぼ其の目を舉ぐる可し）

[上句:] 「三省」を明破す。[下句:] 「三」字を暗破す。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：爲人謀而不忠乎（『論語』學而）

爲謀當忠，大賢首以之自省焉（謀を爲して忠に當るは，大賢 首に之を以て自省すればなり）

[上句:] 反って是れ正破なり。[下句:] 「省」字を照らして「乎」字の意を破く。

此れ是れ題意を正破す（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

謀而不忠，負人卽以負身矣（謀りて忠ならずは，人に負きて卽ち以て身に負く）

[上句:] 題に照らして反破す。[下句:] 「身」字に跟（及）びて「乎」字の意を破く。

此れ是れ題意を反破す（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：節用而愛人（『論語』學而）

存節與愛之心者，用足而人悦矣（節すると愛するの心を存する者は，用足りて人 悦ぶなり）

[上句:] 先ず「節」・「愛」を破き。[下句:] 後に「用」を破く。

此れ是れ先ず破き，後に斷ず。又た順破なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

用與人爲國之大端，道在節愛之而已（用と人とは國の大端と爲す，道は之を節愛するに在るのみ）

[上句:] 是れ「用」・「人」を破き。[下句:] 後に「節」・「愛」を破く。

此れ是れ上の「道〔千乗之〕國（〔千乗の〕國を道く）」に跟（及）びて倒

破す（『初學玉玲瓏』不分卷・四葉・「破題」条）。

題目：弟子入則孝（『論語』學而）

教弟子以孝，于入而急盡焉（弟子に教うるに孝を以てするは，入るに于いて
急ぎ盡せばなり）

[上句:] 分破なり。[下句:] 「則」字意なり。

此れ是れ倒破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

爲弟子之職，當先凜^{おこな}于其入焉（弟子の職を爲うは，當に先ず其の入るを凜に
すればなり）

[上句:] 先ず「弟子」を破き。[下句:] 下に跟（及）びて後に「天」字を破く。

此れ是れ順破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：出則弟（『論語』學而）

不敢忽于其出者，長在則然也（敢えて其の出るを忽せにせざる者は，長く在
りて則ち然ればなり）

[上句:] 「出」字を明破す。[下句:] 「弟子」を暗破す。

此れ是れ順破なり。又た上は破き，下は斷ず。（『初學玉玲瓏』不分卷・五
葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

弟爲弟子所宜盡，無容急于其出也（弟は弟子の宜しく盡す所と爲せば，其の
出るに急ぐ容^べきこと無きなり）

[上句:] 「弟子」を明破す。[下句:] 「出」字を明破す。

此れ是れ倒破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：謹而信（『論語』學而）

弟子之言行、有必當交修者焉（弟子の言行は、必ず當に交ごも修むべき者有り）

〔上句：〕 渾破なり。〔下句：〕 「而」字の意を暗破す。

此れ是れ渾破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

教弟子以謹信、言行其交修矣（弟子に教うるに謹信を以てすれば、言行 其れ交ごも修む）

〔上句：〕 明破なり。〔下句：〕 「而」字の意なり。

此れ是れ先ず破き、後に斷ず（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：而親仁（『論語』學而）

仁者親之、母以泛愛而已也（仁者は之に親しみ、以て泛愛する母れ）

〔上句：〕 明破し一に上を我（找：補足）す。〔下句：〕 「而」字の神を暗破す。

此れ是れ先ず破き、後に斷ず（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

仁在衆愛統之、更不容已也（仁は衆愛に在りて之を統ぶれば、更に已む容からざるなり）

〔上句：〕 先ず「仁」字を破く。〔下句：〕 後に「親」字を破く。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：事父母能竭其力（『論語』學而）

竭力以事親、其能不易及也（力を竭くして以て親に事えれば、其の能 及び易からざるなり）

〔上句：〕 倒破して「能」字を破くに及ぶ。〔下句：〕 下の「學」字を破く。

此れ是れ先ず破き、後に斷ず（『初學玉玲瓏』不分卷・五葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

誠于事親者，不自有其力也（親に事えるに誠なる者は，自から其の力を有せざるなり）

[上句:] ^① 註に照らして「事父母」を明破す。[下句:] 「竭」字を暗破す。

此れ是れ順破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条）。

①『論語集注』學而・「事父母能竭其力」条の朱注に「[「事父母」などの] 四者，皆な人倫の大なる者なり。之を行なうに必ず其の誠を盡す。學は是の如きのみ。故に子夏の言，能く是の如きの人有り，苟し生質の美に非ざれば，必ず其の學に務めるの至りなり。或いは以て未だ嘗て學を爲さずと爲すと雖も，我 必ず之を已に學ぶと謂うなり」。

題目：事君能致其身（『論語』學而）

致身以事君，其能亦不易也（身を致して以て君に事えれば，其の能 亦た易からざるなり）

[上句:] 倒破なり。[下句:] 「亦」字は，上句より来る。

此れ是れ一句もて題を破き，一句もて下を注す（『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

誠于事君者，不自有其身也（君に事えるに誠なる者は，自から其の身を有せざるなり）

[上句:] 分破なり。[下句]については説明なし

此れ是れ順破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条）。

題目：君子不重則不威（『論語』學而）

重不可少，不重者外無可觀矣（重きは少く可^かからず，[そして] 重からざる

者は外に観る可きもの無し)

[上句:] 反題して正破す。[下句:] 「不威」を暗破す。

此れ是れ先ず題意を破き、後に題面を破く(『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条)。

題目: 又 (同上)

君子有不重之失、已無可畏之威矣(君子 重からざるの失有れば、已に畏る可きの威無し)

[上句:] 明破す。[下句:] 下を斷ず。

此れ是れ分破なり(『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条)。

題目: 則不威(『論語』學而)

無威可畏、知質之宜重矣^①(威の畏る可き無くして、質の宜しく重んずべきを知る)

[上句:] 明破す。[下句:] 上の「重」字を我^{ママ}(找:補足)す。

此れ是れ先ず題意を破き、次に上文を我^{ママ}(找:補足)す(『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条)。

①『論語集注』學而・「君子不重」条に「游子 曰く、君子の道は威重を以て質と爲し、學 以て之を成す……」。

題目: 又 (同上)

威有從出不威者、當自謹矣(威の威ならざるに従^より出づ者有れば、當に自から謹しむべし)

[上句:] 先ず「威」字を破く。[下句:] 次に「不威」を破く。

此れ是れ上正下反なり。暗に「不重」に跟(及)ぶ(『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条)。

題目：主忠信（『論語』學而）

以忠信爲主者，自修之本也（忠信を以て主と爲す者は，自から修むの本なればなり）

[上句:] 破き^{おわ}完れり。[下句:] 一句に托す。

此れ是れ先ず破き，後に斷ず（『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

學不可無所主，●（一字不明）居之以我焉（學 主とする所無かる可からざれば，●之に居るに我を以てす）

[上句:] 「主」字を明破す。[下句:] 「忠信」を暗破す。

此れ順破にして又た分破を見す（『初學玉玲瓏』不分卷・六葉・「破題」条）。

題目：無友不如己者（『論語』學而）

學必有資乎，友君子宜知所擇矣（學は必ず資有り，君子を友として宜しく擇ぶ所を知るべし）

[上句:] 先「女不」を破く。[下句:] 次に「無友不如」の意を破く。

此れ是れ題意を渾破す（『初學玉玲瓏』不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

友勝己者，而已得其益矣（己に勝る者を友とすれば，己 其の益を得）

[上句:] 反破なり。[下句:] 一句に托す。

此れ是れ題面を反破す（『初學玉玲瓏』不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：過則勿憚改（『論語』學而）

改過勿吝，過而無過矣（過を改むるに吝しむこと勿れ，[そうなれば] 過ちても過無きなり）

[上句:] 明破なり。[下句:] 一句に托す。

此れ是れ上は破き、下は斷ず（『初學玉玲瓏』 不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

終舉自修之道，在速于改過焉（終に自修の道を舉ぐるに、過ちを改むるに速なるに在り）

[上句:] 題意を破く。[下句:] 「憚改」を暗破す。

此れ是れ先ず題意を破き、後に題面を破く（『初學玉玲瓏』 不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：民德歸厚矣（『論語』學而）

德化于厚，民非無良也（德 厚きに化すは，民 良無きに非ざればなり）

[上句:] 本面。[下句:] 一句に扣（触れる）す。

此れ是れ上に破き、下に斷ず（『初學玉玲瓏』 不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

德爲民之所自具，其歸厚有由也（德は民の自ら具うる所と爲す，[だから] 其の厚きに歸すは由^{ゆえ}有るなり）

[上句:] 「民德」を破く。[下句:] 「歸厚」を破き，●（一字不明）上に跟（及）ぶ。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：求之與（『論語』學而）

以求測聖人之聞政，見已陋矣（「求」を以て聖人の政を聞くを測るは，已に陋^{しめ}たるを見す）

[上句:] 本面を破く。[下句:] 一句を斷ず。

此れ是れ先ず破き，後に斷ず（『初學玉玲瓏』 不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

測聖人以求，若有未敢定者焉（聖人を測るに「求」を以てするは、未だ敢て定めざる者有るが若し）

[上句:]「求」字を明破す。[下句:]「與」字を暗破す。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：抑與之與（『論語』學而）

賢者轉測聖人之聞政，而仍未敢遽定焉（賢者は轉じて聖人の政を聞くを測る，而れども仍お未だ敢て遽かに定めざるなり）

[上句:]「抑」を暗破す。[下句:]「與」字の意なり。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・七葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

更以與擬聖人者，與求同一私意也（更に「與」を以て聖人に擬せんとする者は，「與」・「求」と同一の私意なり）

[上句:] 破完。[下句:] 上に照らして一句を斷ず。

此れ是れ上は本題を破き，下は上を照らして斷ず（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：夫子温良恭儉^マ上（讓）以得之（『論語』學而）

政之得聞，徳容之感也（政の得て聞くは，徳容の感なり）

[上句:]「得」字を破く。[下句:] 次に「温良」を破く。

此れ是れ倒破にして又た分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

聖人之徳容，感人最神也（聖人の徳容は，人を感じしむるに最も神なり）

[上句:] 上の七字を渾破す。[下句:]「以得」を破く。

此れ是れ順破にして又た分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：可謂孝矣（『論語』學而）

孝不易言，有所以可謂者焉（孝 言うに易からず，[しかし] 謂う可き所以の者有り）

[上句:] 題意。[下句:] 題面。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

孝之可謂，以心之不忍忘親也（孝の謂う可きは，心の親を忘れるを忍びざるを以てすればなり）

[上句:] 破き^{おわ}完れり。[下句:] 上文の意を倒して找（補足）す。

此れ是れ先ず題面を破き，後に上意を我^{ママ}（找：補足）す（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：禮之用（『論語』學而）

賢者欲維禮，而先思夫其用焉（賢者は禮を維せんと欲し，而して先ず夫れ其の用を思う）

[上句:] 全章を冒（総括）す。[下句:] 題面。

此れ是れ先ず下を冒（総括）し，次に題に扣（触れる）す。又た分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

禮爲人所用，則用非可苟焉矣（禮は人の用いる所と爲せば，則ち用いるは^{かりそめ}苟にす可きに非ず）

[上句:] 破き^{おわ}完れり。[下句:] 下句を含む。

此れ是れ先ず本面を破き，次に下句を含む（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・

「破題」条)。

題目：言可復也（『論語』學而）

能復言者，不待復而後知也（能く復^ふみ言う者は，復^ふみて而して後に知るを待たざるなり）

[上句:] 「復」・「言」を明破す。[下句:] 「可」字の意なり。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

言不易復，惟近義者可復焉（言の復^ふみ易からず，惟だ義に近づく者は復^ふむ可し）

[上句:] 題意を反破す。[下句:] 上に跟（及）ぶなり。

此れ是れ先ず題意を破き，次に上に跟（及）びて正に還る（『初學玉玲瓏』不分卷・八葉・「破題」条）。

題目：恭近於禮（『論語』學而）

恭而中節，已爲有禮之恭矣（恭にして節に中るは，已に禮有るの恭と爲す）

[上句:] 「蔡^マ（恭）」を照らし破く。[下句:] 「礼」字を破くなり。

此れ是れ分破なり。上は「近〔於〕禮」を暗破し，次は一句に扣（触れる）して下を含む（『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

禮以節恭，可思夫能近者焉（禮は節を以て恭なれば，夫の能く近づく者を思ふ可し）

[上句:] 「恭」字・「礼」字を破く。[下句:] 「近」字を破くなり。

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条）。

題目：君子食無求飽（『論語』學而）

觀君子之食, 無庸心于飽也(君子の食を觀るに, 心を飽くるに庸いる無きなり)

[上句:] 先ず「食」字を破く。[下句:] 次に「無求」を破くなり。

此れ是れ分破なり(『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条)。

題目: 又(同上)

君子志不能在食, 故于飽無所求焉(君子 志は食に在る能わず, 故に飽くるに于いて求むる所無し)

[上句:] 下を柱とす。[下句:] 題に還る。

此れ是れ先ず下意を透し、次に正面に還る(『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条)。

題目: 而慎於言(『論語』學而)

言易于事, 君子之所慎也(事うるの易きを言うは, 君子の慎む所なり)

[上句・下句:] 「事」字の相形に借り, 「而」字の神を得。

此れ是れ分破にして又た倒破なり(『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条)。

題目: 又(同上)

慎有與敏交飭者, 君子又用心于言矣(慎しむは敏と交ごも飭する者有り, 君子 又た心を言に用う)

[上句:] 「而」字の意を破く。[下句:] 順破なり。

此れ是れ分破にして又た順破なり(『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条)。

題目: 就有道而正焉(『論語』學而)

觀君子之就正, 虛懷若谷矣(君子の正に就くを觀るに, 虚懷(謙遜)なると谷の若し)

[上句:] 本面を破く。[下句:] 一句を托す。

此れ是れ先ず破き, 後に斷ず(『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条)。

題目：又（同上）

君子不敢自恃，故于有道是正焉（君子敢て自から恃まず，故に有道に于いて是れ正し）

[上句:] 題意。[下句:] 題面。

此れ是れ先ず斷じ，後に破く（『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条）。

題目：富而無驕（『論語』學而）

賢者再論處富，而計及于無驕焉（賢者再び富に處るを論じ，計 驕ること無きに及ぶ）

[上句・下句:] 分破。

此れ是れ順破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・九葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

富能自守與無諂者，同量焉（富みて能く自から守ると諂^{へつら}うこと無き者とは，同量なり）

[上句:] ① 註に照らして「無驕」を破く。[下句:] 上を領す。

此れ是れ先ず本題を破き，次に上句を顧みる（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

- ①『論語集注』學而「富而無驕」条の朱注に「…常人 貧富の中に溺れ，自から守る所以を知らず。故に必ず二者の病有り。諂うこと無く，驕ること無ければ，則ち自から守るを知る…」。

題目：未若貧而樂（『論語』學而）

能忘乎貧者，較之無諂有進矣（能く貧を忘るる者は，之を諂^{へつら}うこと無きに較べて進む有り）

[上句:] ① 註に照らして「樂」字を破く。[下句:] 「未若」意を暗破す。

此れ是れ暗破にして又た倒破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

- ①『論語集注』學而「未若貧而樂」条の朱注に「…楽しむは則ち心廣く體胖にして、其の貧を忘る…」。

題目：又（同上）

境逆而心樂守貧者，未若矣（境逆にして心樂しみ貧を守る者は，未だ若かざるなり）

[上句:] 「貧」・「樂」を破く。[下句:] 「未若」を破く。

此れ是れ明破にして又た倒破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

題目：其斯之謂與（『論語』學而）

賢者有會于未若之謂，而舉斯以爲証焉（賢者「未だ若かず」の謂に會する有りて，斯〔の詩（衛風・淇澳）〕を舉げ以て証と爲すなり）

[上句:] 先ず「謂」字を破く。[下句:] 次に「斯」字を破く。

此れ是れ倒破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

因斯而有悟者，得其所謂矣（斯に因りて悟る有る者は，其の謂う所を得）

[上句:] 先ず「斯」字を破く。[下句:] 後に「謂」字を破く。

此れ是れ順破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

題目：患不知人也（『論語』學而）

人之不知，君子所當深患也（人の知らずは，君子の當に深く患う所なり）

[上句:] 無し [下句:] 無し

此れ是れ分破なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

題目：又（同上）

以不知人爲患，患其在己也（人を知らずを以て患いと爲すは、其の己に在るを患うなり）

〔上句：〕破き^{おわ}完れり。〔下句：〕一句に托す。

此れ是れ先ず破き，後に斷ず（『初學玉玲瓏』不分卷・十葉・「破題」条）。

（ii）『初學啓悟集』

『幼童舉業啓悟集』⁽⁵⁾（乾隆十一年〔一七四六〕汪承忠自序・道光二十年〔一八四〇〕序）では，破題をつぎのように解説する。

破題とは，題中の意を説破するなり。謂うに題 整うものは，破くに之を分かつを以てす，題 晦きものは，破くに之を明らかにするを以てす。承題とは，破題の未だ盡さざるの意を承けて發明する者なり。凡そ破題を^な做

-
- （5）光緒十四年（一八八八）重鐫『増註啓悟集（柱は「初學啓悟集」とする）』（乾隆十一年〔一七四六〕汪承忠自序・嘉慶二十一年（一八一六）黃品南序）は，黃品南（餘姚の人）が詮解を行っており，文字の異同がある。その「破題」条は，つぎのようになっている。
- 破題とは，題中の意を説くなり。謂うに題 整うものは，破くに之を分かつを以てす，題 晦きものは，破くに之を明らかにするを以てす。承題とは，破題の未だ盡さざるの意を承けて發明する者なり。凡そ破題を^な做すは，止だ兩句を用うのみ。務めて渾括（概括的）清醒（明晰）・確切にして移らざるを要す。〔破題の〕兩句中に明破・暗破・順破・逆破・分破・總破・對破・正破等の法有り。間に反破を用いる者有るも，〔これは〕成才（有能な人）にして方めて之を爲す可し。初學は宜しく輕がろしく^{なら}効うべからず。又た上句もて章旨を顧み，下句もて本題を破く有り・上句もて本題を破き，下句もて章旨に跟（及）ぶ者有り・上句もて全章を冒（総括）し，下句もて本題を破く者有り・上句もて本題を破き，下句もて或いは下を吸（含ませる）す，或いは直斷す，或いは虛托する者有り・兩句もて連珠の下を貫くが如くする者有り・兩句もて連環迴轉して相抱くが如くする者有り。總じて題目の何如なるかを看るのみ。上句は歇語を用いず。「焉」字・「也」字・「者」字・「之」字は間に或いは之れ有り。下句の歇語は則ち「也」字・「焉」字・「矣」字・「者也」・「者焉」・「者矣」・「而已」等の字を用う。「乎」・「哉」・「耶」・「歟」等の字の若きは，斷じて用う可からず。又た破題は，上に連なる可からず，下を犯す可からず，漏題す可からず，罵題す可からず。語 〔題目の〕上文を粘ける，是れ「上に連ぬ（連上）」と謂う。語 下文を露わにす，是れ「下を犯す（犯下）」と謂う。題の緊要の字 未だ曾て破全するを経ず，是れ「題を漏らす（漏題）」と謂う。題目の字の少なき者 全然て^{すべ}書き出す，是れ「題を罵る（罵題）」と謂う。此の四病 必ず染まる可からず（『増註啓悟集（柱は「初學啓悟集」とある）』卷一・一葉～二葉）。

すは、止だ両句を用うのみ。務めて渾括（概括的）清醒（明晰）・確切（綿密）にして移らざるを要す。其の法は、上に連ぬ可からず・下を犯す可からず・題を漏らす可からず・罵題す可からず。語 [題目の] 上文を^{はりつ}粘ける、是れ「上に連ぬ（連上）」と謂う。語 下文を露わにす、是れ「下を犯す（犯下）」と謂う。題[目]の緊要の字 未だ破出するを経ず、是れ「題を漏らす（漏題）」と謂う。題目の字の少なき者 ^{すべて}全然て^か書き出す、是れ「題を罵る（罵題）」と謂う。而して句中に明破・暗破・順破・逆破・分破・摠（總）破・對破・正破等の法有り。間に反破を用いる者有るも、[これは] 成才（有能な人）にして^{はじ}方めて之を為す可し。初學は宜しく^{なら}輕がろしく效うべからず。又た上句もて韜を^{はじ}願み、下句もて本題を破く有り・上句もて本題を破き、下句もて韜章に^{はじ}跟（及ぶ）者有り・上句もて全章を冒（總括）し、下句もて本題を破く者有り・上句もて本題を破き、下句もて或いは下を吸（含ませる）す、或いは^①直斷す、或いは虚托する者有り・両句もて連珠の下を貫くが如くする者有り・両句もて連環廻轉して相い抱くが如くする者有り。摠（總）じて題目の何如なるかを看るのみ（『幼童舉業啓悟集』初集・「破承題法」条）。

①斷：『制義綱目』に「前事に即きて其の意を判〔斷〕するを「斷」と曰う。……子聞之曰可以爲之文矣」（『論語』憲問）は「斷」なり……」（『制義綱目』不分卷・二十六葉・「六曰斷結」条）。

破題とは、題目の意味を解き明かすものである。題目の内容がはっきりと整ったものであるならば、分析して解き明かせばよい。題目の内容がはっきりしないものであるならば、それをはっきりさせて解き明かせばよい。破題は、二句で作成し、概括的・明晰であり適切できっちりしたものが要求される。文法のうえで、題目の上の出題範囲になっていない部分まで入れて破題を作る（連上）・題目の下の出題範囲となっていない部分を入れて破題を作る（犯下）・題目のキーワードを解き明かさず破題を書く（漏題）・題目の文字が少なく、それをすべて書き出す（罵題）は行なってはならない。句法には、明破・暗破・順破・逆破・分破・總破・對破・正破などがある。反破を用いる者もいるが、初学者

は簡単に用いないほうがよい。また、上句で、題目を含む章全体を考慮し、下句で本題を解くもの・上句で本題を解き、下句で題目を含む章全体の意味に及ぶもの・上句で題目を含む章全体を総括し、下句で本題を解くもの・上句で本題を解き、下句で出題されない後文（下の部分）を含ませるもの、または下句でただちに断定するもの、または仮託するもの・両句で連なった珠のようにするもの・両句で連なった環を回転させるようにするものなどがある。つまりは題目からどのような解法を用いるか考えるのである。

つづけて、虚字の使い方にもふれる。

上句は歌語^①を用いず。「焉^②」字・「也^③」字・「者^④」字・「之^⑤」字は間に或いは之を用う。下句の歌語は則ち「也^⑥」字・「焉^⑦」字・「矣^⑧」字・「者^⑨也^⑩」・「者焉^⑪」・「者矣^⑫」・「而已」等の字を用う。「乎^⑬」・「哉^⑭」・「耶^⑮」・「歟^⑯」等の字の若きは、斷じて用う可からず（『幼童舉業啓悟集』初集・「破承題法」条）

①歌語：「歌語とは、乃ち文字の歌足する處にして、宜しく用いる所の者なり。其の義に虚歌・實歌・順歌・逆歌の同じからざる有り。須らく其の文勢に随い、斟酌して之を用うべし」（『舉業辨字』歌語辭第七・三十二葉）。

②焉：「〔「也」字と同じく〕亦た平落の辭なり。但だ「也」字に較べて韻 畧ば輕清にして、意 畧ば虚活なり。以て「也」字は平にして下に就き、「焉」字は平にして上に就く。蓋し少々擬筆するの住法なり」（『舉業辨字』歌語辭第七・三十三葉・「焉」条）。

③也：「平落の辭なり。凡そ文字の平々と落下し、高さ太はだ揚がらず、低さ太はだ煞さざる者は、之を用う。又た一句中の半落して復た起こる者も亦た之を用う。「可也簡」（『論語』雍也）・「赤也惑」（『論語』先進）の類の如し（『舉業辨字』歌語辭第七・三十二葉・「也」条）。

④者：『舉業辨字』に、

物に即して襯墊するの辭なり。凡そ人を指す・物を指す・事を指す・理を指すに必ず此れを用いて之を襯す。

人を指すは、「從我於陳蔡者」（『論語』先進）・「有荷簣而過孔氏之門者」（『論語』憲問）・「夫召我者」（『論語』陽貨）の類の如し。

物を指すは、「五穀者」（『孟子』告子上）・「為叢毆爵者」（『孟子』離婁上）の

類の如し。

事を指すは、「予所否者」（『論語』雍也）・「屏氣似不息者」（『論語』郷黨）の類の如し。

理を指すは、「我非生而知之者」（『論語』述而）・「其有不合者」（『孟子』離婁下）・「所欲有甚於生者」（『孟子』告子上）の類の如し（『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉～三十四葉・「者」条）。

とある。

⑤之：『舉業辨字』に、

此の字は取用 甚だ衆し。故に其の義 一ならず。學ぶ者は、辨ぜざる可からざるなり。

或いは「的」字の鮮に作る。「大學之道」（『大學』經）・「天命之性」（『中庸』）・「禹之聲」（『孟子』盡心下）の類の如し。

或いは「於」字の鮮に作る。「之其所親愛」（『大學』傳第八章）「往送之門」（『孟子』滕文公下）の類の如し。

或いは「往」字の鮮に作る。「子之武城」（『論語』陽貨）・「自楚之滕」（『孟子』滕文公上）・「牛何之」（『孟子』梁惠王上）・「有司未知所之」（『孟子』梁惠王下）の類の如し。

或いは人を指して言う。「門人厚葬之指顔淵」（『論語』先進）・「富之・教之指衛民」（『論語』子路）・「知而仲（使）之指管叔」（『孟子』公孫丑下）・「不授者殺之指亳民」（『孟子』滕文公下）の類の如し。

或いは理を指して言う。「知者過之」（『中庸』第四章）・「博學之」（『中庸』第二十章）・「知之者」（『論語』季氏）・「為之難」（『論語』顔淵）・「予一以貫之」（『論語』衛靈公）の類の如し。

或いは事を指して言う。「左丘明恥之指巧言令色足恭」（『論語』公冶長）・「裨諶草創之指為命」（『論語』憲問）・「為之猶賢乎已指博奕」（『論語』陽貨）・「四方來觀之指葬事」（『孟子』滕文公上）の類の如し。

或いは物を指して言う。「王曰舍之指牛」（『孟子』梁惠王上）・「匠人斲而小之指大本」（『孟子』梁惠王下）・「殺而奪之指酒食」（『孟子』滕文公下）・「又從而招之指豚豚」（『孟子』盡心下）・「館人求之弗得指●（一字不明）」（『孟子』盡心下）の類の如し（『舉業辨字』襯語辭第四・二十二葉～二十三葉・「之」条）。

とある。

⑥矣：「截然として緊煞するの辭なり。凡そ文義の説き煞（しめくく）らんと欲すれば

則ち之を用う。一定にして移らざるの意有れば、又た抑して復た起こるの辭なり。凡そ將に下文を^の申べんとす、故に一按^なを作する者は亦た之を用う。「既富矣」(『論語』子路)・「日月逝矣」(『論語』陽貨)・「吾見亦罕矣」(『孟子』告子上)の類の如し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉・「矣」条)。

⑦者也:「二字 連用す。蓋し指す所有りて順い落すの辭なり。文義 已に畢れば、之を多用す」(『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「者也」条)。

⑧者焉:「指す所有りて軽く住むの辭なり」(『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「者焉」条)。

⑨者矣:「指す所有りて收(収)め煞(しめくく)るの辭なり」(『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「者矣」条)。

⑩乎:『舉業辨字』に、

疑いて未だ定まらずの辭なり。商量の意有り。咏歎の意有り。辨駁の意有り。俱に上文に隨いて之を用う。

商量は、「夫子為衛君乎」(『論語』述而)・「大宰知我乎」(『論語』子罕)・「賢者亦樂此乎」(『孟子』梁惠王上)の類の如し。

咏歎は、「不其然乎」(『論語』泰伯)・「學者其可不盡乎」(『中庸』三十三章の朱注・『論語』學而「曾子曰、吾日三省吾身・・・」条の朱注)の類の如し。

辨駁は、「君子亦黨乎」(『論語』述而)・「其何傷於日月乎」(『論語』子張)・「●●●(三字不明)乎」の類の如し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「乎」条)。

とある。

⑪哉:『舉業辨字』に、

畧ぼ「乎」字と近似す。然れども「乎」字は軽く揚がり、「哉」字は直ちに捷す。「乎」字は多く疑う。「哉」字は却って驚き怪しむの意・嗟歎の意・贊揚の意・自得の意有り。凡そ文の之に反せんと欲する・之を駁せんと欲すれば、則ち此れを用う

驚き怪しむは、「是誠何心哉」(『孟子』梁惠王上)・「不仁者可與言哉」(『孟子』離婁上)の類の如し。

嗟歎は、「管仲之器小哉」(『論語』八佾)・「吾何以觀之哉」(『論語』八佾)の類の如し。

贊揚は、「郁々乎文哉」(『論語』八佾)・「有心哉」(『論語』憲問)・「豈曰小補之哉」(『孟子』盡心上)の類の如し。

自得は、「舍豈能為必勝哉」(『孟子』公孫丑上)・「吾何為不豫哉」(『孟子』公孫丑下)・「豈不綽々然有餘裕哉」(『孟子』公孫丑下)の類の如し(『舉業辨字』

歇語辭第七・三十四葉・「哉」条)。

とある。

⑫耶：「亦た疑うの詞なり。「乎」・「哉」字と相い類す。但し微かに婉轉（婉曲で含蓄ある）たる詰問の意を帶ぶ。「乎」・「哉」字に較べて趣味（味わい）悠長なり」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「耶」条）。

⑬歟：「乎」字と同義なり。然れども「乎」字は輕く、「歟」字は穩（やす）らかなり。「乎」字は疑いて未だ定まらず。「歟」字は則ち疑いて而れども疑わざる者の在る有り。「其斯之謂歟」（『論語』季氏）・「君子人歟」（『論語』泰伯）の類の如し」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「歟」条）。

上句には末尾の虚字を用いないが、文中に「焉」・「也」・「者」・「之」などの文字を用いるものもある。下句では、「也」・「焉」・「矣」・「者也」・「者焉」・「者矣」・「而已」などの文字を用いる。ただし、「乎」・「哉」・「耶」・「歟」などの文字は決して用いてはいけない。

なお、「乎」・「哉」・「耶」・「歟」等の字を「斷じて用う可からず」という。それは、『舉業辨字』の説明からすると、これらの虚字には、疑問などの意味があり、破題の末尾に用いると、破題が完結する意味合いが出ないというのであろう。

[用例]

『初學啓悟集』にある用例は、承題とひとつになっている。そこで、『初學啓悟集』の用例については、「承題」の『初學啓悟集』条で検討したい。

(iii) 『初學文法入門醒』

同治六年（一八六七）重鐫の『初學文法入門醒』は、破題をつぎのように説明する。

破題は、題 整うものは破^とくに以て之を分かち、題 暗きものは破くに以て之を明らかにするなり。其の法 兩句を用う。明破・暗破・順破・逆破・正破・反破・分破・合破の同じからざる有り。其の兩句の中に、上句は章

旨を領して下句は本題を講ず、或いは上句は本題を講じて下句は章旨を領する者有り。上句もて通章を冒（総括）し、或いは下文を冒（総括）す、或いは一句を虚領し、下句もて本題に扣（触れる）する者有り。上句もて本題を講じ、下句もて或いは離開す、或いは下を吸（含ませる）す、或いは直斷す、或いは虚托す、或いは上文を迴抱する者有り。更に兩句もて門筋の對峙するが如き者・兩句もて連珠の下を貫くが如き者有り。其の大慨

總じて「破意（意を破く）」・「破句（句を破く）」・「破字（字を破く）」の三様より出でず。而して又た上に連なる可からず、下を犯す可からず、漏題す可からず、罵題する可からず。要するに題の旨を扼（おさ）え、題の神を鎖（とじこ）め、渾括（概括的）簡淨・精確にして移らざるを以て妙と爲す（『初學文法入門醒』・講題・一葉・「破題」条）。

破題は、題目の内容がはっきりと整ったものであるならば、分析して解き明かせばよい。題目の内容がはっきりしないものであるならば、それをはっきりさせて解き明かせばよい。破題は、二句で書き表す。明破・暗破・順破・逆破・正破・反破・分破・合破の異なった句法がある。そして、破題の二句において、上句で、題目を含む章全体を考慮し、下句で本題を解くもの・上句で本題を解き、下句で題目を含む章全体の意味に及ぶものがある。上句で題目を含む章全体を総括したり、出題されない後文（下の部分）を総括したり、仮に句を受けたりして、下句で本題に触れるものがある。上句で本題を説明し、下句でそこから離れたり、出題されない後文（下の部分）を含ませたり、ただちに断定したり、仮託したり、出題されない上文（題目の上の部分）を連なった環を回転させるように取り込むものなどがある。また、上下の兩句で門柱が対峙するようなものや、兩句で連なった珠のようにするものもある。つまりは、「破意（意を破く）」・「破句（句を破く）」・「破字（字を破く）」からはみ出ないものである。さらに、上に連なってはいけないし、下を犯してはいけない、題目を漏らしてはいけない、罵題してはならないのである。要するに題目の要旨をおさえ、題目の精神をとじ込めて、概括的に明晰であり、適切であることが求められる。

そして、つぎのようにいう。

蓋し破題は兩句に過ぎずと雖も、能く功を爲し、亦た能く過ちを爲す。作手 或いは一破に於いて即ち身分（本領）を見し、識力^{しめ}を見し、通篇の案を定む。人をして一見して、便ち滿眼（ひたすらに）せしむる者は、此れ上等と爲す。之に次するは、或いは題内の生情（含蓄）に於いて、情（すぐれた）句を作りて討好（すぐれた効果を得る）す、或いは題外の寫照に於いて、上に跟（及）びて上を抱く、下を偷みて下を吸（含ませる）すを論ずる無く、俱に能く逸句を以て人を動かす。此れ皆な能く功を爲す者なり。又た之に次するは好好に本題を安頓する^{もと}を要むる莫く、只だ平淡妥適なるを求めるなり。單に點（かぞえあげる）し過去（ゆく）を作るを讓（責）む、此れ尤も應試の第一の要道なり。切に生造（文をでっち上げる）扭捏（もったいをつける）し、一破を以て即ち厭を生ずること莫きなり（『初學文法入門醒』・講題・一葉・「破題」条）。

破題は、上下の兩句にすぎないが、この個所で成功したり、過ったりするのである。作者は、この破題において本領を発揮し、識見を示し、全体のプランを定める。人にその文をひたすら読ませるものは、第一級とする。題目の含蓄するところを素晴らしい句を作って効果を示す、または題目外の描写において、題目として出題されていない上・下の箇所を含めたり、上・下の箇所を含ませたりすることにかかわりなく、すぐれた句で人を感動させるのは、すべて功をなすものである。さらに、主題を適切に配置することだけを求めず、ただ平淡で妥当なのを求めることがそれに続くのである。單純に題目の主題をかぞえあげてゆくことを責める、これは、受験するうえで第一に必要な点である。くれぐれも文章をでっち上げ、もったいをつけ、破題をつまらないものにしてはならない、という。

[用例]

題目：學而時習之（『論語』學而）

學能無間於時，其功爲已深矣（學は能く時に^{へだて}間らるる無し，[だから] 其の功 已に深しと爲す）

此れ上句もて本題を破き，下句もて下文を起こすの法なり（『初學文法入門醒』破題・一葉）。

題目：其爲仁之本與（『論語』學而）

爲仁必有所自始，大賢思孝弟而有餘情矣（仁を爲すに必ず自り始まる所有り，大賢は孝弟を思いて餘情有り）

此れ上句もて題面を破き，下句もて題神を破くの法なり（『初學文法入門醒』破題・一葉）。

題目：吾日三省吾身（『論語』學而）

大賢誠於自治^①，故日有三省焉（大賢は自から治むに誠なり，故に日に三省有り）

此れ上句もて虚領し，下句もて實還するの法なり（『初學文法入門醒』破題・一葉）。

①『論語集注』學而「吾日三省吾身」条の朱注に「……己を盡すを之れ忠と謂う。實を以てするを之れ信と謂う。傳とは，之を師に受くを謂う。習とは，之を己に熟するを謂う。曾子 此の三者を以て日々其の身を省みる。有れば則ち之を改む。無ければ則ち勉むるを加う。其の自から治むるの誠切なること此の如し。學を爲する本を得と謂う可し……」。

題目：主忠信（『論語』學而）

天下無不誠^①之學，君子當知所主焉（天下 誠ならざるの學無し，[だから] 君子 當に主とする所を知るべし）

此れ上句もて虚論し，下句もて實還するの法なり（『初學文法入門醒』破題・一葉）。

①『論語集注』學而「主忠信」条の朱注に程子を引いて「……程子 曰く，人道 唯だ忠信に在り。誠ならざれば，則ち物無し。且つ出入に時無く，其の^{むかうところ}郷を知る

莫き者は人心なり。若し忠信無ければ、豈に復た物有らんや。

題目：無友不如己者（『論語』學而）

友以求益也，損友當戒矣（友は以て益を求むなり，[だから] 損う友は當に戒しむべし）

此れ題意を暗破するの法なり（『初學文法入門醒』破題・一葉）。

①『論語集注』學而「無友不如己者」条の朱注に「……友は仁を輔ける（『論語』顔淵）所以なり。己に如かざれば，則ち益無くして，損有り」。

題目：求之與（『論語』學而）

賢者測聞政之由，而先以求擬之焉（賢者 政を聞くの由を測るに，先ず「求」を以て之に擬す）

此れ上句もて下文を冒（総括）し，次句もて本題に扣（触れる）するの法なり（『初學文法入門醒』破題・一葉）。

題目：道之以德（『論語』爲政）

以德道民，非徒恃乎政者也（徳を以て民を道びく，徒に政に恃むのみに非ざるなり）

此れ上句もて本題を破き，次句もて上文を抱くの法なり（『初學文法入門醒』破題・二葉）。

題目：吾與回言終日（『論語』爲政）

與言而至終日，時之久者言自多矣（與に言いて終日に至り，時の久しき者は言 自から多し）

此れ一句もて還題し，一句もて題情を寫くの法なり（『初學文法入門醒』破題・二葉）。

題目：與之粟九百（『論語』雍也）

粟有不得不與者，雖多而實非多也（粟に與えざるを得ざる者有り，多しと雖も實は多きに非ざるなり）

此れ題意を虚破するの法なり（『初學文法入門醒』破題・二葉）。

題目：以能問於不能（『論語』泰伯）

不自恃其能者，並忘乎人之不能也（自から其の能を恃まざる者は，並びに人の不能を忘るるなり）

此れ順破の法なり（『初學文法入門醒』破題・二葉）。

題目：兄弟怡怡（『論語』子路）

有獨宜於怡怡者，以兄弟不同於朋友也（獨り怡怡に宜しき有る者は，兄弟の朋友に同じからざるを以てなり）

此れ倒破の法なり（『初學文法入門醒』破題・二葉）。

題目：有德者必有言（『論語』憲問）

徳不因言而見，言可因徳而徴也（徳は言に因らずして見^{あら}われ，言は徳に因りて徴す可きなり）

此れ廻環の破法なり。又た開合の破法なり（『初學文法入門醒』破題・二葉）。

題目：夫子不答（『論語』憲問）

以不答爲答者，聖人之深於答也（答えざるを以て答えと爲す者は，聖人の答うるに深ければなり）

此れ題に就きて情を生ずるの法なり（『初學文法入門醒』破題・三葉）。

題目：攻其惡（『論語』顔淵）

惡之當攻也，惟不寬其在己者而已（惡の當に攻むべきや，惟だ其の己に在る

者を寛にせざるのみ)

此れ一面もて本題を寫き、一面もて下文を照らすの法なり (『初學文法入門醒』破題・三葉)。

題目：君子一言以爲知 (『論語』子張)

言之足以見知者，無俟乎多也 (言の以て知らるるに足る者は，多きを俟つ無きなり)

此れ題情を暗取するの法なり。蓋し字を破くは，意を破くの妙と爲すに如かず。次句の明らかに一言を説き出すが若きは，未だ趣を少く^かを免れず。惟だ暗取の法を用い，一言二字をして隱隱に言外に在りて見得すれば，便ち多少の意味有るに資す。初學 須らく會心に善くすべし (『初學文法入門醒』破題・三葉)。

(つづく)